

撰新都字郡誌

緒言

本書ハ小學ノ課程ヲ修ムル子弟ヲシテ郡内地理ノ一斑ト其史談トヲ知ラシムルヲ以テ目的トセリ

本書ハ都字郡誌各村誌及莊官所藏ノ舊記ニ據リテ之ヲ編纂セリ

明治二十八年三月

編者識



撰新 都 字 郡 誌 目 次

○ 總 誌

一 丁

○ 村 誌

二 丁

加 茂 村

二 丁 表

撫 川 村

二 丁 裏

庄 村

三 丁 表

中 庄 村

四 丁 裏

豐 洲 村

五 丁 表

江 島 村

五 丁 表

早 島 村

五 丁 裏

箕 島 村

六 丁 裏

妹 尾 村

六 丁 裏

大 福 村

七 丁 裏

山 田 村

七 丁 裏

撰新都宇郡誌

原 繁太郎著

新編 宇都郡誌

都宇郡は山縣の西部なる備中國の東
南隅に位し東北は賀陽東は津高御野西
は窪屋南は兒島に界す東西の長さ二里
餘南北の長さ二里半にして略ぼ菱形を
なし面積殆ど四万里あり概ね沃野にし

て、中央と西北境とに、一帯の山脈あるも、山地は僅に面積の五分の一に過ぎず。足守川は東部を北より南に貫き、児島の内灣に入る。寒暑共に溫和にして、極暑には九十二度、極寒には四十度の温度なり。物産は農産には米、麥、蠶豆、藺草の類、鑛産には銅、水産には鰹、牡蠣、伏老の類、製造品には綵、莖、疊、表、小倉織、足袋、團扇の類を産

し。綵、莖は多く海外に輸出す。戸數凡そ七千一百、人口凡そ三万一千ありとぞ。

村誌

○加茂村は新庄上、新庄下、津寺、加茂、惣爪と稱ふる五の大字を合し、ものにて郡の北端に位し。足守川は中央を北より南に貫き、庄村に入る。其東は平地にして、其西は山地なり。村の南端を東より西に通

じたるを西國街道とす。

○撫川村は中撫川下撫川大内田と稱ふる三の大字を合しゝものにて加茂村の南に連りて郡の東部に位す南境の外は概ね平地にして天正の頃(紀元二千二百四十六年)に海面を開きしものなりといふ足守川は中部を北より南に貫き山田村に入る足守川に跨り西國往來の縣道に沿ひ庭瀬村に

隣りて市街をなせるを撫川といふ戸數凡そ二百四十ありて警察分署裁判所出張所郵便局を置く又精米製麩の工場あり團扇は此地の名産なり此地は延寶の頃(紀元二千三百四十年)より明治の初に至るまで戸川氏の治所たりしとぞ山陽鐵道は村の南部を東より西に貫けり。

○庄村は日畑東組日畑西組西尾矢部山

地、上東下庄栗阪松島二子と稱ふる、十の
大字を合しよものにて、加茂村の南撫川
村の西に連れる郡中第一の大村なれば、
耕地の廣さ七百町ありといふ。されども、
山脈は西と南との境に亘りて西境の山
脈には日差仕手倉高取の諸峯あり仕手
倉山は直立一百丈餘郡中第一の高峯た
り日差山は天正の昔(元二十二年百四十二年)小早川隆景

吉川元春等が壘を構へて羽柴秀吉と對
陣せしところなり村の南部を東より西
に通じたるを西國往來の縣道とし其の
南に隣りて通じたるを山陽鐵道とす足
守川は村の東端を南下して撫川村に入
る其西岸の小丘を片岡山といふ往昔(元
十六年三)吉備津彦命が石楯を築きて新山の
鬼の城に據れる溫羅と對陣し給ひしと

ころなりしとぞ。

○中庄村は徳芳鳥羽中庄黒崎と稱ふる
四の大字を合しよものにて撫川村の西
庄村の南に連りて郡の西部に位す北は
平地にして田圃開け南は山地にして銅
鑛を産す北境には西國往來の縣道東よ
り西に通ず其南に隣りて通じたるを山
陽鐵道とす。

○豊洲村は五日市中帶江西田早高高須
賀と稱ふる五の大字を合しよものにて
中庄村の南に連りて郡の西部に位す西
北隅の外は概ね平地にして總て寛永の
頃(紀元二千二百八十五年)より漸く海面を開きしものな
りといふ。

○江島村は早島新田帶江新田と稱ふる
二の大字を合しよものにて豊洲村の東

に隣りて郡の南端に位す。全く平地にして、寶永（紀元二千三百六十七年）の頃（ハカニヨ）に海面を開きしものなりといふ。帶江新田の西端に位せる市街地を茶屋町といふ。戸數凡そ六百五十ありて商工の業盛に行はれ、會社工場頗る多く、小倉織（オウ）及綾苳（リヨウ）を産す。

○早島村は前潟早島、矢尾と稱ふる。三の太字を合ししものにて、豊洲村の東江島

村の北に連りて、北は中庄庄撫川の三村と界を接ゆ。北部は山地にして、三谷越（サンヤクゴシ）の新道を撫川村に通ず。之を郡の南北の通路とす。南部は平地にして、市街をなせる一部を早島といふ。戸數凡そ六百五十ありて郵便局を置く。花苳を製する會社工場多し。此地は寛永（紀元二千二百九十二年）の頃より明治の初に至るまで戸川氏の治所たりしと

ぞ。

○箕島村は早島村の東に連りて北は撫川村に隣る。北部は全く山地にして石炭を出せども其質良しからざるをもちて之を採らず。南部は平地にして田圃開け人家散在す。

○妹尾村は箕島村の東に隣り郡の東南に位す。中部は山地にして花崗石を出だ

す。四國街道は東北より斜に西南に通じ、街道に沿ひて市街をなし戸數凡そ九百あり。古來鹽表の産地なりしをもちて今尙ほ盛に花蕙を産す。又兒島の内海に近きをもちて漁業大に行はれ鰻牡蠣伏老の類を産す。此地は寛文の頃(和元二千三百二十九年)より明治の初に至るまで戸川氏の治所たりしとぞ。

○大福村は、大福、古新田コシンデンと稱ふる。二の大
 字を合ししものにて、郡の東南端に位し、
 妹尾村の東に連りて、東北の方は、足守川
 に沿へり。全く平地にして、寛永の頃に（元祖
 九十二年）海面を開きしものなりといふ。村
 の南部を、東北より斜に西南に貫きて、妹
 尾村に通ぜるを、四國街道とす。

○山田村は、山田、妹尾崎イモヅキと稱ふる。二の大

字を合ししものにて、妹尾、大福兩村の西
 に連り、箕島、撫川兩村の間に夾まる。南部
 は、山地なれども、北部は平地にして、足守
 川北境を貫きて、大福村に入る。

○共有地は、面積凡そ二十七町四段にし
 て、兒島郡東興除村トウキョウゾクの内にあり。其由來を
 尋るに、明治の初、岡山縣にて、兒島灣の海
 面を開きしとき、郡の疏水を害するをも

て小田縣の參事益田包義氏の盡力をりて其一部を譲りて之に報ゆるに至れり橋本貞固氏の郡長たるや之が維持の法を立てたり其後郡民物を二氏に贈りて其徳に報ひしとぞ。

撰新都宇郡誌終

明治二十八年四月三日印刷
明治二十八年四月十日發行

定價金貳錢五厘

岡山縣岡山市大字花畑百八十二番邸

著 者 原 繁 太 郎

岡山縣岡山市大字上ノ町六十一番邸

發 行 者 北 村 長 太 郎

岡山縣御野郷鹿田村大字大供六十九番邸

印 刷 者 松 井 審 士 郎

岡山縣岡山市大字東中山下十四番邸

印 刷 所 文 友 館



版權所有



特44

488

025913-000-3

特44-488

都宇郡誌 (新撰)

原 繁太郎 / 著

M28

ADC-3486

